

「Chapter: 二：悪役は、人外属性、お姉さん？」

その声は女性にしては低く、その背丈は男性にしても高かった。

身長が170程の汀よりもさらに高い。下手をすれば、180に届くかもしれない。

そんな人物を女性と推測したのは、そいつが白のアバーヤで顔も体も覆っていたからだ。

アバーヤというと馴染みがないかもしれないが、この場合、首の下を覆う長衣チャドル、首から

上を覆う頭巾ブルカ、さらに口元を隠す覆ヴェールなどで固めた、目元以外一切露出しない女性用完全

装備だと思ってもらいたい(詳しい定義などあたしも知らん)。

さて、この事から想定される可能性は主に二つ。

1…この人が敬虔な女性イスラム教徒である。

2…この人が顔形かおかたちを隠そうとしている。

のいずれかで、ほぼ間違いなく2の理由だろう。…ま、大穴で両方兼ねているのかもしれないが。

…それにしても、この誘いに乗るべきか否か？

数瞬迷ったが、こういう時は直感に従うのがあたしの常だった。すなわち…

「行くわ」

すると汀が小声で尋ねてくる。

「いいの？」

「だって、お姉さんにナンパされているんだよ。断る理由なんてないでしょう？」

「…君、美人局つつもたせには気を付けなさいよ」

汀は呆れていた。が、あたしも無条件で行くつもりはない。

「ただし、条件が二つあるわ」

「何だ？」

「一つ、店をあたしに選ばせて欲しい」

「いいだろう」彼女は躊躇わずに即答する。「持ち合わせは少ないが、奢ってやつても構わない」

「もう一つ、あなたの素顔も見せて欲しい」

「…それは構わないが…」今度は彼女も躊躇い、条件を付ける。「ただ、見せるのは、店で話を終えた後、顔だけだ」

「…？ 別にいいけど…」

あたしは怪訝に思った。素顔を見られたくないという人間は一定存在する。保身上の、

あるいは宗教上の理由で、だ。しかし、彼女の声はいささか感傷的なものだった。

「では、店を指定してくれ。奢るとは言ったが、あまり高い店や遠い店は勘弁してくれよ」
「はい。じゃあ、あそこで」

あたしは世界的に有名なハンバーガーチェーン店を指差した。

「ご注文は何になさいますか？」

「ぬるい水とチキンバーガーを」

「ぬるい水とライスバーガーを」

その店員の笑顔はアバーヤ女と汀の答えで微苦笑へと変わった。

「…アンタら嫌な客だな」

あたしは店員の微苦笑を代弁してやった。あと、汀はやっぱり米が恋しいんじゃん。

「冷たい水は体に悪い」

「同感ね。こういう気遣いこそが女子力」

「いや、衛生管理を考えると冷えていた方が…」

あたしは再び店員の微苦笑を代弁してやった。あと、このアバーヤ女、実は中央アジア出身か？

とはいえ、店員はさすがにプロだった。戸惑いながらも、自分の職務を果たそうとする。

「う、承りました。そちらのお客様は？」

「じゃあ、バリューセットAでお願いします。あ、ついでにミルクセーキのLも一つ持ち帰り付けてください」

「あ、かしこまりました」その店員は一瞬ありがとうございませうと言いつつ、さうになっていた。

「ぬるい水とチキンバーガーをお一つ、ぬるい水とライスバーガーをお一つ、バリューセットAをお一つに、ミルクセーキのLお持ち帰り用がお一つ、以上でよろしいでしょうか？」

あたしたちは無言で頷く。

「では、こちらの番号札をお持ちになって、席の方でお待ち下さい」

言われた通り、あたし達三人は客席に座る。

すると、店内の注目があたしたちに集まっていた。

宿での一件が尾を引いている事もありえるが…単にこの娘三人の組み合わせが、人の目を引くだけと考えるべきだろう。今時人間が接客している事からもわかるように、この千歳ちとせは飛天市ほど、電子化機械化が進んでいない。したがって、瞬時に情報が共有される

事もない。しかも、北海道の治安は悪くなっているので、『あの程度の事件』では報道も大袈裟にはなるまい。

何より、あたし自身結構目立つ方なのだ。

だって、超ド級の美少女だから!

……と言いたいところだが、実際にはそれだけではなく、あたしの白皙赤毛という日本人離れした容姿や、SFっぽいぴっちりスーツ、それを隠すために羽織っているマントがまた人目を引いている事は間違いない。

じゃあ、他の恰好でもしたらって? いやいや、そうはいかない事情があってね……。

「さて……アタシの名はシージンという」と、アバーヤ女改め自称シージンは言った。

「まず時間を割いてくれたことを感謝するよ。——キャロット・マリオン嬢、並びに松前汀嬢」

「……バレバレってわけ?」

「いや、名前ぐらいしか調べられなかった。これが本名かどうかとも怪しい」

「そうなの?」

あたしは肩を落とした。実際、あたしとしても、汀の素性は気になるところだった。

「ああ。キャロット嬢については≪マリオン≫の一人、それもやや特殊な事例だろうと、推察しているだけだ」

「……ま、大体合っているわ」

「汀嬢に至っては、飛天市市民というところまでしか探れなかったよ」

「……」

あたしは横目で汀を見る。しかし、この帯刀女子高生は鉄面皮を崩さない。

その時、ちょうど、

「ご注文をお持ちしました。ぬるい水とチキンバーガーをお一つ、ぬるい水とライスバーガーをお一つ、バリューセットAをお一つに、ミルクケーキのLお持ち帰り用がお一つでございます」

と店員さんが注文を運んできてくれた。

娘三人で飲み物に口を付けると、自然と沈黙が訪れる。

その中で、最初に口を開いたのはシージンだった。

「そうだ。ついでに謝罪もしておく」

「あなたとは初対面のはずだけど?」

「ああ、だが、阿久津——アタシの弟分が世話になったようだ」

「ごめん。何の事かわからない」

「今朝、ホテルを襲撃した男だよ」

「……」

あっさり認めやがった。

「悪いね。あいつも焦っているんだ」

「それで、いきなり発砲した事がチャラになると？」と、これは汀の台詞。

「だから、アタシが直々に出てきたのさ。女同士の方が何かと話し易いしな」

「あー、わかるわかる。あたしも男の人ってちよつと怖くってさー」

あたしが賛同すると、何故か汀が奇妙な目であたしを見ていた。

「だろう。阿久津の奴もな、どうも女が苦手らしいんだ。だから……」

「それで、いきなり発砲した事がチャラになると？」と、これは再び汀の台詞。

シージンは言葉を遮られた事に驚いたようだ。

「……汀嬢、だからそれを謝罪した上で交渉したいと言っているんだ。お互いプロだろう。

ここは頭を切り替えて……」

「私はプロではない」汀がキツパリと言う。「私は平凡な女子高生であり、一介の市民よ。

そこまでの理性を期待されても困る」

「……………」

……刃渡り1メートルを超える日本刀を振り回すねーちゃんがとんでもないことを言い

やがった。

「わかったよ」シージンは呆れたように言う。「細かい前置きは抜こう。交渉がしたい。

話を聞いてくれるか？」

あたしは頷き、汀も続いて頷く。

「よし。なに、難しい話ではない。野盗のねぐらから、奪ったものを返して欲しい」

どうやら、こいつの目的も弟分の阿久津とやらと同じらしい。

「どれを」

「全部だ」

「ただで？」

「百万」

「米^{アメリカ}ドルで？」

「日本円に決まっているだろう？」

「安い」

「なら、いくらだ？」

「勿論、一億」

「……話にならん」

「……というか、結局百万ドル要求するのね……」

最後の台詞は汀のものだ。どうも、この一件についてはあたしに対し批判的である。

「仕方がない。交渉決裂だ」

あまりにもあっさりと話は終わってしまった。まだ、ハンバーガーには誰も手を付けていない。

「つまり、ここでやるって事？」

「まさか」と、シージンはせせら笑った。「アタシは話があると声をかけたんだ。今日のところは大人しく退散するよ。アタシはこれでも信義を重んじるからね。……ああ、勿論、そちらの気が変わったなら、喜んで手のひらを返すよ？」

「……」

シージンは意外と紳土的、もとい淑女的で、あたしも咄嗟に対応できなかった。

「店員さん、それは持ち帰りだ。ああ、包んでくれ」

そう言って、シージンはチキンバーガーを包ませる。その上で三人分の金を尋ね、払い、立ち去りかける。

あたしは戸惑いながら、肝心な事を聞く。

「約束、忘れてないかしら？」

「ん？ ああ、そうだったな」

シージンはアバーヤをめくり、あたしたちに素顔をさらす。

「……………!」

あたしと汀は背筋を凍らせた。

それは最初、樹皮にも見えた。

アバーヤの下のシージンの顔立ちそのものは紛れもない美形だった。その長身から妄想していた通りの野趣溢れる麗人……。

……ただし、その髪は奇妙に硬質な緑色で、何よりその肌は灰色の牡蠣かきのようなもので覆われている。

そういう病がある事は知っている。先天的な免疫異常で……いやいや違うだろう。

これはきつと……

「異形細胞……」

汀がぼつりと呟いた。

隣の汀も息を飲んでおり、あたしと同じ答えに辿り着いたらしい。

——そんな……『甲冑式異形』って事??

「ま、そういうわけだ」

シージンは軽い口調でそう言って、再びアバーヤでその顔を隠す。

すると、店の外にヘルメット男がバイクで乗り付けてきた。アバーヤ女は店を出ると、そいつにチキンバーガーを渡して、後部座席に乗る。

じゃあな。

シージンは店の外から、そんな風に手を振って、バイクは去っていった。

翌日の道中はあまりよい雰囲気ではなかった。

辺り一帯も、なんとなくピリピリしていて、どうにも慣れない。

あたしはとうとう弱音をこぼす。

「……あ、あのシージンって、甲冑式異形じゃないよね？」

「……だとしたら、勝ち目はないわ。実際、あの威圧感だったし……」

汀の答えも強気とは言えないものだった。

しかしそれも無理なからぬ話だろう。

何しろ、甲冑式異形の戦闘力は人間大の戦闘へりに喩えられる程だ。まさに《荒夏》における戦術上の切り札。最強の歩兵用装備。文字通りの一騎当千、万夫不当である。

概念自体は単純で『異形細胞を強化外骨格として装着運用する』というものだ。

しかし、実際の甲冑式異形の性能は凄まじいものだった。結晶細胞の特性による隠密

性と展開力。異形細胞の筋肉による運動性と打撃力。甲冑式異形使者はそれらすべてを

兼ね備えた過剰性能の【超兵器】とすらいえた。

ここで「あれ？ その異形細胞で出来た《トカゲモドキ蜥蜴擬き》は昨日あっさり倒していない？」
と思ったそのあなた、それは異形開発者である《荒夏》をわかっている。

そもそも《荒夏》の連中は概ね人生と人間を愛していた。

当然、それを破壊する戦争を忌み嫌っていた。信用できないなら、少し考えて欲しい。

《荒夏》は高学歴高所得者の集団だった。平和の中で利潤を上げ続けられるのだ。そんな連中がその既得権益を破壊しかねない戦争を好むだろうか？ 答えは否だ。純軍事的にも、人口比率で劣る。全面戦争は避けたがっているのだ。

だから、荒夏は工場設備への《異形》技術の投入には非常に積極的だった一方で、軍事技術への応用には消極的だった。

その中でも、あのトカゲモドキ蜥蜴擬きのような自律式異形兵器の攻撃力向上には甚だ冷淡だった。

何故って? もう一度、考えて欲しい。あれらはその名の通り、『自律的』な存在なのだ。うかつに人殺しの力を与えたいだろうか?

勿論、あの蜥蜴トカゲモドキ擬きも非武装の民間人相手には十分に脅威である。だが、武装した兵士相手には、実のところ脆い。囷おとりを兼ねた露払いか、待ち伏せや数合わせにしか使えない。工業製品としてはともかく、戦闘兵器としてはいまいちで、意図的に機能抑制ダウングレードが行われていたという説もあるぐらいだ。

だからこそ、あたしたちも雑魚を屠るように、異形を倒す事が出来る。

だが、甲冑式を用いる異形使役者は違う。

あれは人間が装着する事を前提にしたシステムなのだ。

そして、『荒夏』にとって人間こそが、最も貴重な資産だった。数的不利が明確な上、地政学的事情もある。『建国理念』からも同胞の命は重んじざるをえない。彼らは米軍や自衛隊——それこそイスラエル軍以上に、兵士の損耗を抑えようとしていた。

(余談だが、あたしが超絶美少女なのも、身体の線が丸出しピチピチな格好なのも、そういった『荒夏』思想の影響が強い。つまり、全面戦争を回避するための広報宣伝であり、それを前提に進歩した技術体系のためである。あたし程ではないが、汀も似たようなものだろう)

だから、自律式異形とは逆に、甲冑式異形へは過剰ともいえる技術と資源——さらには熱意が込められた。その結果、甲冑式異形は荒夏が独占していた結晶細胞技術の集大成となった。

「そんな伝説の【超兵器】とまともに戦ってもね……」

勿論、気になるところがないわけでもない。

「でも、甲冑式異形だとしたら、なんでそれを着こんでやってきたんだろう? それこそ

甲冑みたいに脱げるのが利点なんだよ。わざわざあんな目立つ格好をする理由って何?」

「ハッターって事?」

「実はただの特殊メイクとか?」

「……………」

あたしたちは二人で沈黙した。

たしかにあれが特殊メイクによるハッターの可能性もある。ただし、それはいかにもな希望的観測だった。もっと合理的な説明もできる。例えば、あれは核兵器みたいなもので、甲冑式異形の保有を明確にする事で、交渉を有利に進めようとしているのかもしれない(実際に、あたしはビビっている)。あるいは甲冑式異形を保有していても、『展開』する前に殺されてしまっただけの意味がないから、わざわざあの恰好でやってきたのかもしれない

(実際に、汀の抜刀術なら、『展開』前に仕留める事もできそうだ)。

「キャロット、君は何を盗んで、あんな連中に追いかけられる羽目になったの？ 正直に話さない」

「……はい」

汀のお姉さん口調に、あたしは正直に答えるしかなかった。

「大雑把に分けて三つよ」

「一つ目は？」

「5・7×28ミリ弾。でも、これは除外してもいいかも……」

「聞いた事ない口径だわ」

「……だから、価値があるのよ」

ついでに言えば、あたしの使うFN・P90の弾でもある。たしかに有名とは言い難い口径だ。そして、だからこそ、あの時、最優先で補充したのだが……。

「といっても、所詮は大量生産される消耗品。わざわざ追いかけてくるほどの価値があるかという……」

「微妙ね。では、二つ目は？」

「Cz75。それも初期型よ」

「……何それ？」

「知らないの？！ オートハンドガン自動拳銃における進化の いただき頂、完成形に到達したとされながら、東西冷戦の悲劇ゆえ、西側に輸出される際に品質を落とされ……」

「つまり君はガンオタなのね？」

「な、ななななな何を言っているの？」

「だって、そんな事を言うのって大概キモオタ……」

「ほ、ほんとに凄いだよ。あたしも噂でしか知らなかったけど、フレームとスライドがぴったりなんだよ！ 硝子みたいな鉄でつくられてるんだよ！ 叩くと、カンというよりチンって響くんだよ！」

「？ 金属製なの？」

あー、この帯刀女子高生、拳銃は全部プラスチック製と思っている類だな？ おのれ、現代っ子め！

あたしは憤慨していたが、汀は無視して、最後の質問をする。

「で、三つ目は？」

「大きな結晶細胞」

「……イマジナルディスクじゃないでしょうね？」

汀が眉をひそめたのも無理はない。何故なら、《イマジナルディスク幻想円盤》とはZIPファイルの様に、異形細胞を圧縮した結晶細胞の事で、自律式甲冑式を問わず《異形》の核となる部分だ。これを状況に応じて、『展開』出来る事こそ、《異形》の圧倒的な優位性／利便性である。……なお、これの元ネタはZIPファイルではなく、生物学でいう《イマジナルディスク成虫原基》なのだが、ま、そこはあたしも現代っ子ということだ。

ただし、実際にはむしろ、

「多分、演算結晶の一種だと思う」

「根拠は？」

「《イマジナルディスク幻想円盤》にしては大き過ぎる。ヒトの頭ほどの大きさがあるもん。普通に演算装置でしょう？」

「なるほど」

と汀は納得した。何しろ、イマジナルディスクは一般にヒトの拳ほどの大きさなのだ。なら、あれは常識的に考えて、演算結晶だろう。

「中身についてはわからないの？」

「そんなのわかるわけないって」あたしは肩を竦める。「演算結晶って、何だかんだで、量子コンピュータの一種よ。通常のフォンノイマン型とは概念そのもの違う。だから、既存の機材とは通信自体が成立困難だし、仮に……」

あたしが口を閉ざすと、汀が言葉をつないだ。

「通信が成立しても、そんな特殊な言語、君の様な野蛮人は理解不能というわけね」

あたしは少しイラッとしたが、一応事実だけを伝える。

「勿論、一定量持ってきた5・7×28ミリ弾の中に何か仕込んである可能性は絶無とも言えない。Cz75も出すところ出せば高値で売れるだろうし、昔の『割り符』みたいな使い方をされるのかもしれない。けど……」

その次の瞬間の事だ。

大量の《異形》があたしたちを取り囲んだ。

汀は野太刀の鯉口こいぐちを切ると、神速の踏み込みで、先に仕掛けた。

まず居合抜きで《異形》の一体を真っ二つにする。さらに返す刀でもう一体を横に薙ぎ

斬る。

無数の《異形》はより優先的な敵性存在と認めたらしく、次々に汀へと襲いかかる。しかし、汀はそれらを次から次へと返り討ちにする。

先に有利な位置を専有し、《異形》が機械的に襲いかかるのを、最低限の挙動で回避。さらに《異形》の速度をも利用する形で斬り捨てる。

汀の振る舞いは優雅な演武の如く――斬って斬って斬りまくっていた。

あたしはというと……そんな汀無双を見てるだけ。

一応、飛びかかってきたトカゲモドキ蜥蜴擬き一匹を引き付けてから撃ち殺したが、それだけ。後は汀に任せきり。これはらくちんだー。

……てか、汀の野太刀は元々こういう戦いのために作られた気がしてきた。

普通、異形細胞はあんな豆腐の様に斬れるものではない。また《異形》は力においても速さにおいてもヒトを上回っているのだ。

そんな《異形》の群れを、汀は『技』で屠り続けている。

まるでゲームの様な光景だった。いや、現実問題、自律式の異形はその思考ルーチンがアクションゲームと大差がない。であるからこそ、こんな蹂躞戦を成し遂げられる(勿論、命がけの実戦で常に冷静適切な判断を下し、行動を続けられる精神力と持久力と戦術眼はあつての話だが)。

しかし、そんな汀の戦い方は、人間の判断で銃弾が飛び合う近代戦に向いているとは、言い難い。

むしろ、汀の太刀筋は、あたかも人間に仇なす異形を斬るべく、最適化されているようだった。

結局、そんな汀は最後の一匹をも軽々と切り捨てる。

そして、汀が相変わらず見事な動作で刀を鞘に納めて……。

あたしへ問いかける。

「どういうつもり？　ずっと、後ろで隠れているなんて？」

「……」

「一応は期待していたんだけどね。君が遠距離から射撃してくれれば、私は近距離からの斬撃に専念できるって……」

「……」

「で、君が戦闘に参加しなかった理由は？」

「……多分……この一帯の地下には磁鉄鉱か何かがある」
「それで君のカンが狂ったって事なの？ その結果、本来の戦闘能力を發揮できる自信が持てず、戦闘への参加に消極的だったと？」

「そ、そうよ」

「まるで『甲冑式異形使役者』ね」

「……っ！」

「あれも展開した異形細胞の【超感覚】が微弱な磁気を感じする事で魔法の様な先読みの一端を担っていたらしいわ。その反面、ECM (Electronic Counter Measures / 電子妨害妨害手段) や、ECCM (Electronic Counter Counter Measures / 電子妨害妨害妨害手段) による影響を受け易くなるらし……」

「ち、違う」あたしは思わず抗弁していた。「**あたしたち**はその問題をソフトウェア的に解決できる！ ヒトが視細胞の前にある神経節細胞のせいで発生するマリオットの盲点を、周辺情報で補完している様に！ 識意下で耳から入った音量の感度を調節したり、騒音を自動で除去している様に！ 実際、人為的な電波妨害への耐性は既に出来上がっている！ この天然磁石の影響だって、もうすぐ適切に選別処理でき……！」

「なるほど、それは遺・伝・的・アル・ゴ・ニ・ズ・ム・の・結・果・？」

あたしは反射的にFN・P90の銃口を汀に向けた。

「死にたいの？」

「……悪い事を聞いたわね」

汀は申し訳ないように謝った。心底、申し訳なさそうだった。

あたしの発砲をまるで恐れてはいなかった。

汀にはまだ底知れぬ何かがある。その力で銃弾を防げるのか……。

あるいは、震えるあたしの腕ではどうせ当たらないと見切っているのか……。

「それで怪我の具合はどうなの？」

「はあ？」あたしは銃口を下ろした。「何の話？」

「右のわき腹」

「……っ！」

「君、トカゲモドキ 蜥蜴擬きを引き付けてから、撃ち殺していたけど、あの時、目算でも誤った？」

……その通りだった。あたしとしたことが、あの時、間合いを測り損ねた。この辺りの

磁気異常のおかげで、自慢の勘が狂っていたからだ。おかげで、トカゲモドキ 蜥蜴擬きの爪を右のわき腹に食らう羽目になった。当然、その直後に至近距離からの銃撃で、トカゲモドキ 蜥蜴擬きは無力化、

【融解】させた。が、その負傷のせいで戦闘に参加できなかったのだ。

しかし、悔しいので黙っている。

「出血は止まっている？」

止まっているはずだ。タマゴロモによる診断では内臓は無事らしい。それは携帯端末で確認している。そして、その程度なら、タマゴロモの止血機能で十分なはずだ。

しかし、悔しいので教えてやらない。

「見ていたのなら、わかるでしょう？」

そんなあたしの皮肉に対し

「いいえ」

と汀は意外にも首を横に振った。

「見ていない。私は眼前の『異形』に集中していた。君まで視野に入れる余裕はなかった」

「じゃあ、何でわかるのよ」

「いわゆる『気配』ね」

「はあ？」

「あるいは『遠山の目付』というやつよ。…部分ではなく全体を観る。まずは山を遠くから観て、その自己相似性などから、実際に歩く時に問題となる細部の起伏を想定する」

「そのための山中単独走破だったとでも？」

あたしはせせらわらったが、汀は真顔のままだった。

「人は傷を負えば、動きが変わるの。痛みには耐えられなければ、その痛みを庇う。痛みには耐えられたとしても、傷ある限り、それまでと同じ動きはできない」

それは原理的な必然だという。

「君は右のわき腹に傷を負った。そういう動きをしているの。勿論、あなたが『右のわき腹に傷を負った』という演技をしていれば、話は別よ。でも…君は根が素直だから」

「と、当然よ！あたしは清純可憐な乙女なんだから！」

すると、汀は一人頷く。

「なるほど。やはり『私のカンの良さ』と『君のカンの良さ』は原理的に異なるようね。

一応、表現型は似ているけれど」

「…：相似器官であっても相同器官ではない…：と？」

『私のカンの良さ』はそもそも特定の器官によるものではないしね」

あたしは眉をひそめる。

幾つかの条件付きとはいえ、戦場で無双の働きができるという点で、あたしと汀は共通していた。それはあたしも汀も『ちょっと異常なカンの良さ』を誇るからだ。だからこそ、戦場で敵の攻撃を見切り、あるいは一方的に敵を射殺斬殺する事が出来る。

だから、あたしは汀が同類かもしれないと思っていた。

しかし、汀によるとその根本において異なるという。

「どういう意味よ？」

「そのままの意味よ。あえて付け加えるなら、お互いの能力を理解していないと、齟齬に繋がりがねない。だから、気をつけましようってこと」

「……表現型が同じなら、問題ないでしょう？」

「いえ、問題だわ。例えば、君は地中に埋まった一般的な形式の地雷を直接感知できる？」

「はあ？ そんなの大体は出来るに決まっているじゃ……」

「私にはできない」

「それって……」

事実なら、汀は己の弱みを告白したのだ。いや、でたらめということもあり得るが……。

「だから、その時は教えてちょうだい。そうでないと、私は困る。それが相互理解よ」

「……」

「逆に聞くわね」汀はあくまでも淡々と問いかける。「あなたに銃口を向ける男がいたとする。細かい条件は……そうね、あのビジネスホテルの一件と同じと思ってちょうだい。

その時、あなたはその弾丸を躲せる？」

「不可能よ」

「質問が悪かったわ」汀は苦笑する。「同じ条件で、予め銃弾が自分に命中しない位置に移動する事は出来る？」

「……可能よ」

あたしは渋々答えた。

人間は銃弾を躲す事は出来ない。当然の話だ。が、予め銃弾が自分に命中しない位置に移動する事は出来る。そして、あたしはその能力に著しく秀でている。だから、いつもは余裕綽々なのだ。

「その光景を録画したとする。その録画記録を再生したとして、あなたはその弾道を予測できる？」

「……難しい」

「私にはできる。……ほらね、相互の短所を相互に補完できるわ。これが相互理解というものよ」

「汀は何でもお見通しってわけ？」

あたしは苛々を抑えるため、持ってきたミルクセーキを口に含む。

「それでもない」

その時、帯刀女子高生はたしかに目を丸くしていた。

「ちよつと驚いているわ。あたしの知っている≒マリオン≒は皆、糖分控えめだったから」

その夜、あたしは二人部屋に入って、開口一番、汀に尋ねる。

「ねえ、あたしの事、知っているの？」

「知らない」

「質問が悪かったわ」あたしは昼の意趣返しを疑った。「≒マリオン≒については、知っているの？」

「人間や都市の名にしばしば使われるわね」

「…答えたくないなら、答えなくてもいいんだよ」

「じゃあ、お風呂で話しましょう」

「え…？」

今日の宿も前と同じような中堅ビジネスホテルで、部屋には浴室が備え付けられている。基本、一人用だが、女子二人で使えない事もない。

「え？ え？」

戸惑うあたしを尻目に、汀はしゅるりと制服を脱いでいく。

「何しているの？ 一緒に入りましょう？」

繰り返すが、あたしは清純可憐な乙女である。

だから、誘われてドギマギしていた。

その間にも汀は、ブレザーを脱ぎ、セーターを脱ぎ、タイを外し、ブラウスのボタンを外し、タンクトップブラにすら手をかけていた。

細くしなやかな汀の裸身があらわになる。

——ほ、ほほう…。

が、肝心なところは汀の黒髪に隠れていた。

——く、髪ブラ…！ いや、これはこれで味があっというけど…！

今日の汀は素肌を隠す気がないらしい。そのままブレザースカートの留め金をも外す。しかし、アニメの規制の様にその奥は見えなかった。

「着替えが遅いわね。それでも≒マリオン≒なの？」

汀はタイトと一緒にボクサーショーツを脱ぎ、さっさと浴室に向かう。

「……」

あたしも《マリオン》の端くれ。その精神性は予備役軍人に近いところがある。つまり、着替えが遅いのは無能の証——そう蔑まされている気になり、あたしも慌てて、脱ぐのだった。

あたしも全裸になり浴室に入った。一応、それでも両手で乳房と股間を隠してはいる。

一方の汀は優雅にシャワーを全開にして浴びており、さらに携帯端末から音量を最大で楽曲を流していた。

「……いくらなんでも、ちよつと五月蠅くない？」

「声が漏れたら、困るでしょう？」

「ふえっ……」

声が漏れないように——つまり、声が漏れたら困る事をするという事で……。

あたしが壁際でドギマギしていると、汀があたしを追いつめる形でその壁を右手でドンと突いた。

いわゆる壁ドン。乙女の憧れだった。

「……恥じらっているの？ 本当に《マリオン》には珍しい類ね」

「そ、そう？」

「私が蜻蛉切製作委員会に所属している事は話したわよね？」

「う、うん」

「君の事を上へ報告したら、君の保護と回収を指示された。その過程で『クラスの皆には内緒だよ☆』という条件で、ペラペラとその理由を説明された」

汀の声には不機嫌な音色があった。

あれ、何だか雰囲気おかしくない？

「元々、我々はある親族経営の人材派遣会社にお世話になっているの」

「人材派遣？」

「その名も『マリオン・カンパニー』」

「……！」

あたしは息を呑んだ。汀の見事な肢体も目に入らなくなった。

「——社員は例外なく、《マリオン》という家族名の金髪碧眼の美少女。しかも全員そろって、学業優秀、規律厳格、容姿端麗、スポーツ万能、スタイル抜群……」

……同時に汀が風呂に誘ったのも、ただの盗聴対策である事を悟った。

「……そんなアニメみたいな話、信じていないよね？」

「話で聞くだけならね。でも、この目で見た以上は信じざるを得ない」

「そうじゃなくて。そのマリオン・カンパニーが社員全員金髪碧眼美少女である理由よ。いくら親族経営だからって、不自然でしょう？ まして、それで全員有能優秀なんてさ」

「ええ、そうよ。ずっと不自然に思っていた。≪マリオン≫は顔立ちが皆同じに見えるし……キャロット・マリオン、君も含めてね」

「……人為を疑ったりはしなかったの？ 例えば……」

「遺伝子操作の類を疑った」汀はあっさり答える。「勿論、私は文系少女だから、細かい事はわからない。それでも、金髪などが規格化し易い表現型であろうとは察せた。でも、証拠はなかったし、それほど興味もなかった。……君と出会うまでは」

「あたしと出会って、何か変わったわけ？」

あたしはおかしくなって、つい自分から文字通りの種明かしをする。

「あたしたちが**ヒト受精卵内核遺伝子操作計画**≪マリオンプラン≫の**成果物**だとも言われた？」

「ええ。でも、君は赤毛赤眼。他の≪マリオン≫は全員が金髪碧眼だった」

「髪の色なんて、肌の色と同じで、遺伝要素の計測にはあてにならないんじゃない？ いや、

一見矛盾する様な理屈だけさ」

「加えて、私の知っている他の≪マリオン≫は『規律厳格』だった」

汀は淡々と付け加える。……ん？ あたしディスプレイされている？

「だから、君と山中で出会った時も驚いた。赤毛のマリオンなんて初めて見たし。厳格な集団行動をとる事が多い≪マリオン≫が、『気ままな一人旅』なんてやっている。実際に——これは二日目以降にはつきりしたんだけど——戦い方一つ見ても、単独行動を前提としている節がある」

「でも、それは……」

その時、あたしの感覚野に衝撃が走った。

「やばいっ！ 異形が来るっ！ 部屋の外にもういるっ！」

「こんなところで？ 宿には他にも人がいるのよ？」

あたしたちが慌てて、FN・P90と野太刀を手にとってしばらく……。夜の宿には静寂が続いていた。

汀が先に疑いの声を出す。

「奇妙ね」

「……確かに異形の気配がするでしょう？」

あたしはそう言ったものの、汀が訝しむのも無理はなかった。

異形が来ているのなら、何故誰も騒がないのだろうか？

そもそも、自律式異形はこの手の襲撃には向かないのだ。一般に異形は人間程の精密な(あるいはいい加減な)判断ができない。目標設定ができないわけでもないが、無関係な非戦闘員が異形に驚き叫んだだけで、異形は『動くものすべてに襲いかかる』状態になりかねない。

勿論、その辺りの被害を無視するような連中なら、異形に非戦闘員を無差別虐殺させる事もありえる。[F少年事件](#)などがいい例だ。

ただし、その場合でも、被害者の断末魔はこの宿に響くはずだ。

なのに、この宿は静寂が続いていた。いや、完全な無音ではなかったが、それは人間の生活に不可欠な雑音程度だ。かえって、異形が存在とは辻褃が合わない。

汀が重ねて問いかける。

「……本当に異形がいるの？」

「しつこいわねえ。疑うなら、自分で気配を探ればいいでしょう？」

「私はこの条件だと気配を探れない」

「……ふーん」

いい事を聞かせてもらった。

と、同時に尚の事、あたしが異形の気配を見極めねばならないわけだ。

あたしは目を閉じ、異形の気配を探るのに集中する。

「一つ、二つ、三つ、四つ、五つ、六つ。……この宿に確実にいるって」

「六匹もいて、動きがないのは何故？ 戦術的な理由で待機しているとしても？」

「待機というより……眠っているという感じ？」

「……異形に睡眠の概念があるの？」

「だから、例えだって。六匹であたし達の部屋を外から取り囲んだんだけど、そこでそのまま眠りこけっちゃった——みたいなの？」

「はあ？」

「……待って。人が来る」

「この足音は……女ね？」

今度は汀にも探知出来たらしい。そして、彼女は小声で言う。

「私が出るわ。できれば、援護して」

「……」

あたしが一人だったら、出ない。畏の可能性もあるからだ。

しかし、お人よしの汀にすれば、その女性の身が気がかりだったに違いない。

結局、あたしは頷いた。

そして、あたしと汀が一斉に部屋の外に出ると……。

異形が……寝転んでいた。

文字通り、廊下に寝転ぶ犬のように、トカゲモドキ蜥蜴擬き六匹纏めて動きを止めていたのだ。

「あああ、撃たないで下さい！　ごめんなさい！」

そして、一人の女が両手を上げてひたすら謝っていた。

ぱっと見で二十代。少し癖はあるものの、瑞々しい黒髪を肩までのお下げにしている。

顔立ちも整っているが、汀のような鋭利さは皆無で、柔和な印象が強い。分厚い黒ぶちの

眼鏡に、タートルネックセーターとロングスカートの組み合わせ。今はこんな状況なので、

ドジっ娘風だが、普段はほんわかお姉さんで通っているのかもしれない。

そして、胸元に紅い宝石が輝いている——繰り返すが、容姿は整っている方だ。しかし、

あたしのような派手さもシージンのような異様さもない、普通の女だった。

汀は瞬時に判断したらしい。件の神速で、その女の首根っこを掴み、あたし達の部屋に連れ込む。そして、すぐに鍵をかける。

「え？　ええ？　な、何で鍵をかけるんですか？」

「黙りなさい。私の質問にだけ答えなさい」

汀は無駄のない動きで、女の背に回り込み、その腕を捻りあげ、拘束を完全にする。

「あわわわ、痛い痛い、ごめんなさいごめんなさい」

その女は混乱して、謝罪を続けていた。

そこであたしは二つのことに気づいた。

一つはその女の胸元の紅い宝石が実は指輪であることだ。それこそ、薬指にでもはめるような指輪を、何故か銀の鎖で首からぶら下げている。

もう一つはその女の胸が意外と大きいことだ。セーターがニットで強調されている事を差し引いても、Dはある。下手すると、あたしと同じ位かもしれない。

「へえ、弄り甲斐がありそうなおっぱいじゃん」

あたしは脅しとして、その乳にCz75の先端を突き付ける。弾薬に互換性がないので、使いどころに困っていたが、こういう時は、いかにも自動拳銃という外観が便利だ。

「ひっ、ひんっ」

「あはっ、何？ その声、誘ってるの？ あたしにいじめて欲しいの？ ねえねえねえ？」

女の怯えた声に、あたしは少し興奮した事は否めない。乳房の脂肪を銃口で突き、ぐりぐりと廻る。女が必死に顔を背ける様子がまた嗜虐心をそそる。そのまま、女のセーターの内側に銃口を潜り込ませた辺りで。

「やめなさい。そんな事をしていると、人斬りSAMURAIガールになっちゃうわよ」と、汀が止める。相変わらず良心的で結構な事だ(もつとも、発言の内容の一部は意味不明だったが……)。その上で汀は言葉を継ぐ。

「ただ、私としても色々聞きたいのは同じよ。できれば、素直に答えてくれると助かるわ」

「は、はい。何でも喋ります。だから、酷い事しないで……！」

女は半泣きで頷く。まさに従順そのもの、汀に視線で媚びている程だ。

そして、これが狙いだった。あたしがあんな事をしたのも、あえて悪役を演じる事で、汀が尋問し易くするためである。

あたしの個人的な趣味や嗜好や性癖とは何の関係もない。

……本当だよ？

「わ、私が対異形用の睡眠薬を使ったんです」女の白状はそれなりに衝撃モノだった。

「勿論、異形に睡眠の概念があるか否かはまだ議論の余地がありますが……、とりあえず、異形の運動を大幅に抑制できます。それで、廊下に異形がいたから、慌てて空气中に散布したんです」

「……そんな薬物を撒いたの？」

汀が複数の意味で驚く。実際あたしも同感だった。

「無味無臭なのでお気付きになるのは難しいかと。また、人体をはじめとした既存の生体細胞には一応無害です。いや、長期的な健康被害の可能性までは否定できませんが、緊急避難という事で……」

「待って。あなた民間人じゃないの？ 何で、そんなものを持っているの？」

「えっと、私の専門は、異形細胞の人体医療への応用なんです。その一環として……」

「……………」

あっさりと女は語った。そこに嘘の『気配』はない。だからこそ、あたしと汀は揃って黙り込んでしまう。

異形細胞の性質の研究はまだ十分ではない。その運動を抑制できる薬品というだけでも大したものなのに、しかも人体に無害だという。そんな代物を保有し使用できるとは……。

汀はあたしの疑念を代弁してくれた。

「あなた何者？」

「ええと。私は文月杏ふみつき あんずと言います」

汀はその女の名前に聞き覚えがあつたらしい。

「！　もしや？　あの【紅玉の杏あんず】？　飛天市攻略戦で医者かがみの鑑かがみと言われた？」

「医者かがみの鑑かがみかどうかは別として、【紅玉の杏あんず】と呼ばれる事は多いですね」

汀はその女――【紅玉の杏あんず】とやらの腕を離す。その汀の態度には謝意と敬意が見てとれた。

自由の身になった杏はあたし達二人に向き直る。そして、もじもじしながら、しかし、横目にこちらをちらちらと、だが、確実にガン見しながら、言う。

「あ、あの、とりあえず、お二人とも何か着てくれませんか？」

そこで、あたしと汀と共に全裸である事を思い出した。

あたしと汀が服を着ても、杏お姉さんの頬は染まったままだった。あたしたちの裸身を思い浮かべているのか、それこそ、杏の实の様に赤いままだ。

「お、お二人とも凄くスタイルがいいのですね。やはり≪マリオン≫だからですか？」

「……………」

汀は大きく眉をひそめた。彼女は機密を守るため、生真面目に色々工夫していたのに、このほんわかお姉さんはあっさり口にしたのだ。

とはいえ、そこで杏お姉さんも険悪な雰囲気気付いたらしい。

「あ、あの一定の盗聴対策はしてあります。それに≪アーデルハイト≫プロジェクトも、≪マリオン≫プランも、既に概要については、漏れて困る段階ではなくなっています。都市伝説という形で、かなり正確な情報も出回っていますし、関係者全員の口が塞ぐのも現実的ではありません」

まあ、そうだろうな——とあたしは思った。

だからこそ、汀にもあっさりとは伝えられたのだろうし、元々技術的必然に基づく予言は何度も行われていたし、《荒夏》の技術力がその水準に達している事は誰の目にも明らかだったのだ。

実際汀も納得したのか、否定はしない。

「この娘と違って、私の身体は鍛錬の成果よ」

いや、いくら私が出生前に遺伝子の全面調整を受けているといっても、体型管理に後天的な努力をしていないわけでもないんだけどね……。

あたしは心中で突っ込んでいたが、二人は二人で話を進めた。

「そ、そうなのですか？　まるで彫刻の様に美しかったので……」

「たしかに派生技術の恩恵は受けているわ」

「タマゴロモ繊維……最近なら、ヴァイタルウェアやヴァイタルスーツの様な《マリオンドレス》を含む知的な下着による体型管理及び矯正ですか？」

「それに加えて、《マリオン》プラン》などに使われた遺伝情報からの全細胞表現型予測シミュレーション用超大型演算結晶——通称『生物室』の派生技術よ。既に民生にも応用され初めているの。例えば、体型管理、具体的には減量にね」

今度はあたしが首を傾げる番だった。

「先天的な遺伝子操作作用のシミュレーターが、後天的な減量に役に立つの？　いや、その人の体質にあった減量手法の構築なんかにも使われるんだらうけど……」

「それもあるけど、共生細菌——とりわけ、腸内細菌の遺伝情報からの全細胞表現型予測シミュレーションにも使えるから」

「ああ、なるほど」

あたしは本気で感心した。

いや、待てよ。じゃあ、カレーにキャベツとかいう食い合わせもそういった腸内細菌の育成環境を調えるための『生物室』の指示だったのか？

「山姫姉さまが165センチ48キロで、亜音速斬撃できるだけの筋肉があつて、しかもEカップというのも、こういった総合的・科学的な体型管理の成果なのよ。勿論、あれは極端な成功例だけどね」

「……Eカップって、それだけで1キロぐらいあるんだけど……」

「決して、ラノベワナビが『私も学生時代はBMIが18だったから、(就職後ぶくぶく太ったけど)、ヒロイン連中はBMI17台でも問題ないよね！　バーチャルヒロインがリアルの私より太っているのはおかしいよね！』と考えて、設定して、後悔したわけでは

ないわ……」

「み、汀さん？」

汀はまるで天啓を受けた巫女の如く語り、あたしは何と返せばいいのかわからなかった。一方で杏は「なるほどー」とほんわか笑顔で、

「文明の進歩が人類を栄養失調から解放したように、技術の進歩が女性を肥満からも解放するのですね」

と、まるで宣伝広告のように綺麗にまとめてくれた。

……あたしには少し釈然としない流れだったが。

「では、本題に入りましょう」と汀が言う。「文月杏さん、あなたの本業が医者だという事は知っています。それがこんなところで何をしていますのですか？」

「ええと……」

杏は少し躊躇ったようだが、あたしと汀を前にして、無暗に逆らう気もないようだった。「じ、実は私たちはシージンという女を追っています……」

「あの女を？」

「御存知なのですか？」

これには杏の方が驚いたらしい。だが、汀は必要以上の情報を出さない。

「いえ、よくは知りません。ただ、危険な相手とは認識しています。しかし、何故、医者であるあなたがそんな相手を追ったりしているのです？」

「勿論、私一人で追っているわけではありませんよ。監査顧問として招かれただけです。《荒夏》崩壊後、流出散逸した異形技術は多く、シージン一党もそれを使っているのです。当然、それを追う側も対応策を構築せねばならず、私も技術者の一人として狩り出されたわけです」

「ああ、あの対異形用の睡眠薬もその対応策である？」

「はい。シージン——正確にはその部下の男——が、自律式異形を使役するということで、一応用意はしていたんです。まさかいきなり使う羽目になるとは思っていませんでしたが……」そこで、杏は思い付いたように頭を抱える。「というか、あの異形六体の後始末もしなきゃいけませんよね……。ああ、現地警察との折衝、面倒ですわね」

「そこは【紅玉の杏】の雷名にお任せします」

汀は淡々と厄介ごとを丸投げした。そして、肝心要の質問をする。

「それで、シージンという女は何故追われているのです？ 確かに彼女らは、いわゆる無法者の類かもしれませんが、この『試される大地』北海道では珍しい類ではありません。あなたのような名士までがあえて追いつける理由はなんなのですか？」

「実は……あのシージンという女は荒夏復活を企んでいるらしいのです」

い、いきなり話が大きくなってきた。

汀は露骨に顔色を変えたし、あたしも思わず口を挟む。

「《荒夏》の復活って……何で今さら？」

「わかりません」杏は情報不足を素直に認める。その上で、少し悲しい目になり、「推測ですが、今の日本には自分の居場所はない——シージンはそう考えたのかもしれませんが」

「……」

あたしはシージンの事を思い出す。たしかに彼女には浮世離れた雰囲気はあった。《荒夏》はよくも悪くもこの国に変革を起こそうとした組織である。今の日本に馴染めぬ者達が拠り所とするのは辻褃が合いはするが……。

「ところで、私も聞きたいのですが、あなた方とシージンはどのような関係で？」

「そ、それは……」

「キャロット、正直に話しなさいよ」

考えてみれば、汀はこの点では元々批判的だった。

おかげで、あたしはかくかくしかじかと白状する羽目になったのだった。

* * *

あたしは細かいところをぼかして、なるべく穏やかに説明した。

しかし、それでも衝撃は衝撃だったらしい。

「つ、つまり、こういう事だと？」杏は目をぱちぱちさせていた。「あなたは私利私欲で、野盗のねぐらを襲った。そして、シージン達はあなたがそこで盗んだものを返せと言ってきた。それこそ、シージンは返してくれるなら、金を払ってもいいとまで言った。しかし、あなたはそれすらも突っぱねて、今ここにいますか？」

「……改めて聞くと、とんでもないお嬢ちゃんね……」

汀までもツツコミを入れてくる。ふん、汀だってもう半ば共犯なんだからねっ！

「と、とりあえず、話がのみ込めてきました」

と、杏は惑乱しながらも状況を整理する。

「実はシージン達が荒夏復活の『鍵』を探しているという情報はあったのです。そして、あなた方は知らぬ間にその『鍵』を手に入れたのでしょーう」

『鍵』? 今更そんなものの一つや二つで、荒夏復活なんてできるのでしょうか?」

「できると考え、その可能性に賭けて動いている者がいるのは事実でしょう。そして、『鍵』の正体が私の考えている通りなら、少なくともこの国にもう一度内乱を起こす事は十分可能です」

「……どうやら、この杏には、その正体について心当たりがあるらしい。」

「野盗のねぐらにその『鍵』があつた理由ははっきりしませんが、例によって荒夏崩壊の混乱で流出したのでしょうか。そして、それを今はあなた方が持つていらつしやるのですね?」

杏はあたし達を上目づかいで見る。

「ええ、いつそ、その『鍵』っぽいものをシーズンへまとめて壊しましょうか?」

あたしの提案に、杏は顔色を変える。

「い、いけませんっ! それは正しく使えば、何万という人の命を救う事も出来るのですから!」

「それって、具体的には何なの?」

「そ、それは……」杏は言い淀む。

「口で言えないなら、身体に聞こうかなー」

「ひ、ひい」

あたしが淫らに舌舐めずりをする、杏は脅えて己の身を抱きしめる。しかし、それがかえって、そのわりと豊満な乳房を強調する羽目になる。

「だから、キャロット、やめなさい」

汀が制止し、その上で「では、文月先生、ではこうしましょう」と提案する。

「とりあえず、『鍵』については我々がお預かりします。僭越ながら、私も腕前に覚えがないわけではありません。また、このキャロットも《マリオン》の端くれ、一通りの戦闘訓練を終えているようです」

「ええと、この場で『鍵』を私に預けて下さるわけにはいきませんか?」

「失礼ながら、今、あなたに『鍵』をお渡ししたとして、それをシーズン達の手から守り通せるのでしょうか?」

「それは……難しいでしょうね」杏は素直に認める。「今回は自律式異形だけでしたから、何とかかりましたが、たしかに人間相手だとうはいきません。勿論、本隊と合流すれば、話が別ですが」

「では、文月先生がその本隊と合流するまで、『鍵』は我々が預かります」

「しかし、それではあなた方がシーズン達に狙われるのでは?」

「荒夏復活は、我々にとっても他人ごとではありません。また、今夜は助けていただいたにも関わらず、このロリ巨乳が無礼千万。罪滅ぼしの意味も込めて、困ぐらいはやらせて下さい」

汀は、微妙にあたしをディスプレイつつ、話をどんどん進めていく。

「元々、我々は苦小牧市とまこまいに行く途中でした。文月先生達の本隊とはそこで合流というのがでしよう？」

ここまで提案が具体的になっていくと、杏も反対し難いようだった。

「うーん、私はここであの異形の後始末をしなきゃいけませんし、お二人に苦小牧市とまこまいまで運んでもらった方が、たしかに裏をかく事は出来るかもしれませんね……」

「では、その路線で行きましょう。ああ、申し遅れましたが、私はこういうものです」

そして、汀は携帯端末から身分証明を送信し、電子的な相互自己紹介をする。

「あ、どうも……え、飛天市の正規市民？ しかも、あの蜻蛉切製作委員会の？」

「いまだ囑託の身ですがね」

それが決定打だったらしい。

後はトントン拍子で、汀の提案は通るのだった。

翌朝――。

警察との折衝中の杏を残して、道中歩きながら、あたしは汀に聞いてみた。

「ちょっと意外……」

「何が？」

「汀の事だから、『鍵』をあの人に渡せって言うかと思った」

「……あの手の女はどうも信用ならないのよ」

「あの手の女って？」

「眼鏡で、地味目で、おっぱいがちょっと大きい女。媚びてるって感じしない？」

人斬り

SAMURAIサムライガールとかさ？」

「いや、知らないって」

あたしは呆れた。とりあえず、汀はその人斬りSAMURAIサムライガールとやらが余程嫌いらしいという事だけはわかったが……。

「ところでキャロット、君、本当にあの女――文月杏ふみつきあんずを知らないの？」

「ううん、知らない」

「わりとニュースとかでも有名だったんだけど」

「じゃあ、見てない」

「……一時期、あの人に倣って赤い指輪を首飾りにするのが流行っていたんだけどね」

要は荒夏事変の際にA H A——【対《荒夏》同盟】Anti-Hungry Allianceに所属していた医師の一人らしい。

そして、飛天市攻略戦では、大量の負傷者を敵味方に関わらず無償で治療し続けた。その気高い姿はマスメディアでもネットでも称賛され、『医者^{あんど}の鑑』と呼ばれたという。

「今と違って、当時のA H Aはいわゆる『正義の味方』という認識だったし、【紅玉の杏^{あんず}】はその中でもそこそ若くて小奇麗な女だった。A H A側も宣伝工作に使った事は間違いないから、実態以上に名前が独り歩きしている可能性はある。……とは言っても、そういうのは大概、本人も承知の上だし、大人なら目的完遂のための手段と割り切るものだから……」

「なるほど、ナイチンゲールやマザーテレサの現代版というわけだ」

「というか、本当に知らないの？」

「いや、あたしその頃まだ『施設』にいたからさ」

その一言で、汀は色々察したらしい。しばらく沈黙が続く。

あたしは空気を変えたくて、話題も変える。

「でも、『鍵』ってのはマジかなあ？ 今となっては『悪の秘密結社』扱いの《荒夏》を復活なんてさ……」

「信用できないって事？」

「うーん」

あたしは悩んだ。すると、汀は汀で話を変える。

「それにしても君、何だか今日は弱気じゃない？ 歩き方も変だし、もしかして……？」

「……そうよ。あの日よ。」

「毎月恒例の女の子の日？」

さすがに汀は同性だけあって、こういう時の言い回しは露骨である。

「なら、わかるでしょ。今日のあたしはいつもの動きができないし、気配もほとんど探れなくなる」

「よくわからないの。私は凄く軽い方だから」

汀は相変わらず、そっけない。

「でも、ありがとう。ちゃんと話してくれて」

その汀の台詞に照れなかったかというと、嘘になる。

だから油断したのだろうか？

あたしについて言えば、それは違う。どの道、生理が酷くて自慢の直感がほとんど機能していなかったのだ。

汀については後でわかった事だが、昨夜の異形の時と同じで、こういう条件では気配を探れないらしい。

だから、その後の展開はどのようなもなかったのかもしれない。

次の瞬間、白い影があたしの前にあらわれたのだ。

それがアバーヤを着こんだシーズンだとわかるのと、

あたしがFN・P90を抜きかけるのと、

汀が野太刀を抜きながら駆け寄るのと、

あたしの意識が途切れるのはほぼ同時だった。